



昭和 46 年 (1971 年)
10 月号 (No. 316)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文

- コリーとライストからの便り..... 1
- 山岳創刊号復刻..... 2
- ソ連アルビニズム年鑑..... 3
- レーニン峰周辺図..... 4
- マンズル西壁..... 6
- ユーゴも活発..... 6
- 弥彦山松明登山祭..... 7

海外通信

- ガンガブルナ..... 8
- コラホイ..... 8
- イスラムバート..... 8
- ロンドンから..... 8
- コロンビア水原..... 8
- カトマンズ..... 8
- カシミール..... 8

図書紹介

- 黒部に逝く..... 9
- 東京から見える山見た山..... 9

会務報告

- 9 月理事評議員会..... 9
- ルーム日誌..... 11
- 会員異動..... 11
- 新入会員..... 11

図書室便り

- 新刊図書受入報告..... 9
- 定期刊行物受入報告..... 9

その他

- 第 275 回現地小集会..... 10
- 学生部報告..... 8

コリーとライストからの便り

三田 幸夫

先日、インドのコリーと、スイスのライストから相前後して手紙が届いた。その冒頭にはそれぞれ J.A.C. の依頼で Everest in my Life なる原稿を送ったが、その載っている山日記（一九七〇年版）を未だ貰っていないが、郵送中に紛失したのではないかと案じている、もう一冊送って貰えないかということがある。

調べてみると、両方共送っていないようなので、早速、当方の思わぬ手違いだったことを郑重にお詫びして空送りし、ほっとしたところだ。

同様なケースが会員の寄稿者の中にもあったようなことを聞いたので誠に申し訳なく思っている。山日記にしろ、山岳にしろ編集を担当する人達の多忙さ、労苦は大変なものだが、お互に協力連絡しあって手落ちのないよう円滑にやっつけていきたいものだ。

ライストの手紙には面白いことが書

いてあった。彼は彼の五十歳の誕生日の数日前、この二月十八日にアコンカグアの頂上に立った。彼の五大陸の最高峰に立つという永い間の念願がようやくこれで達成されたのだ。そのたびごとの費用を貯めるために通算二十一年を要したと言っている。その山々は左の通り。

モン・ブラン（一九五〇・九・四）

その後数回。

エベレスト（一九五六・五・二四）

キリマンジャロ（一九六九・一・二二）

マッキンレー（一九六一・五・二一）

アコンカグア（一九七二・一・一八）

ライストはこの外、ペルーの最高峰ウアスカラン（一九六五・十一・七）にも登っている。

そして富士山は未だ也。

そして彼は、国際エベレスト登山隊長のデイレンファースから、日本の植村直己が五大陸の最高峰を登ったと聞いたが、彼のエベレスト以外の山々の

記録については何も知っていない。登頂の年月でも知り度いと言ってきているので、そのデータだけは僕の返信の末尾に書き添えておいた。

植村は、一九六五年ヒマラヤの大雪頂者という栄冠に恵まれて以来、一九七〇年のマッキンレー登頂に至る五年の間にライストと同じ五大陸の最高峰に登っている。しかもエベレストを除く四峯は全部単独登頂という記録を残した。

本年三十一歳という若い彼の山歴としては世界の登山界にも類のない立派なものだと思われる。そしてそこに到達する道についても殆ど彼自身の力で切り拓いている点を買いたい。単独登山という計画については、一応批判はあったかも知れないが、相談を受けた人は彼のことならと賛意を表したことだろう。先日アルゼンチンから帰ったばかりの彼の話では、未だグリーンランドや南極の色々な夢を考えているようだ。好漢の前途に心からの声援を送りたい。

コリー中佐（インド海軍）は、一九六五年のインド・エベレスト隊の隊長

で、九名の隊員が四回にわたって頂上に立つという成果を記録した。

僕は一九六三年、日本のエベレスト登山の許可をとりつづけるべく、ネパール政府と打合わせのためカトマンズを訪れ、その帰途インド登山財団のあるニュー・デリーの国防省を訪ねた。

次官のサリンが財団のチエ・マンで、インド・エベレスト隊の主な連中を集めてくれた。彼等は、六〇年、六年の拳闘の大がかりな挑戦に失敗を喫したのにもかかわらず、すでに入手していた六五年のエベレスト入山許可を二年後にひかえ、謙虚ながらも満々たる意志をおおわせた。

日本も六六年、ブレモンソンの入山許可の内諾を得ていたのでエベレストに対する討論、情報交換が熱心に続けられた。その中心的存在が、ターバンを巻いた彫りの深い端正な顔に美髯をたくわえたコリー（当時少佐）であった。

その頃インドの登山界は急激な躍進途上であり、同じアジアの日本における登山の実力を知っており、ヒマラヤ地元の国として、あらゆる協力と情報の提供を惜しまないと思ふ好意的であった。その手始めとして、当時盛んに

なりつつあったインド女性の登山家達を選び日印婦人合同のヒマラヤ登山隊編成についての熱心な申入れがあった。これが具体化して一九六八年、宮崎隊がカイラス峰に遠征することになったわけである。

そんなことから、コリーとは文通が度重なり、大小色々な日本登山隊がインド登山財団やコリー達のお世話になって今日に至っている。

現在彼は国防省を辞めてインド航空に関係している。前述サリン次官は重工業省の偉い地位に在任しているとい

山岳創刊号復刻版
予約申し込み下さい

会報三二二号でお知らせしたように図書委員会では、本会機関誌「山岳創刊号」の復刻版を発行することになりました。現物と全く同様なものを作ることにしており、頒価は一部千八百円（送料二百円）です。

三百部限定出版で、二号、三号と続けて作る予定しております。すでに多数の会員から予約の申し込みを受けておりますが、すでに書面で予約されております方も、また新しく申し込みされる方も十一月末日までに代金、送料をそえて本会図書委員まであらためて御予約下さるようお願い申し上げます。

会費納入のお願い

本年度会費未納の方がまだかなりあります。現在会費納入率は五十%未満で「山岳」の発行も危ぶまれている状況です。名簿発行など出費が重なり、会の会計は楽ではありませぬ。未納の方は大至急お納め下さい。

『レーニン峰』……
・周辺図

トランス・アライの一部、レーニン峰周辺の地図は、アルバイン・ジャーナルその他でお目にかかっているが、一番大きくて解り易いのはヴィーンのラヴィカが、オーストリア山岳会の会誌 OAZ, Nov./Dec., 1967 に発表したものである。

田村君の貴重な原稿は大部前にモスコから送られて来たものだが、中にある地図をよく調べてからと思っていたので掲載が遅れてしまった。

田村君の作った地図とラヴィカのものとは中央部その他に食い違いが少しあるのを発見したが、地名でラヴィカにならないものもあり、その反対のこともありで、両者を補い合せて書き直したのがここに紹介したものである。「山岳」一九七〇年版にもあらい地図が出されそうになったが、中島君の依頼によりラヴィカ図でそれを修正しておいた。

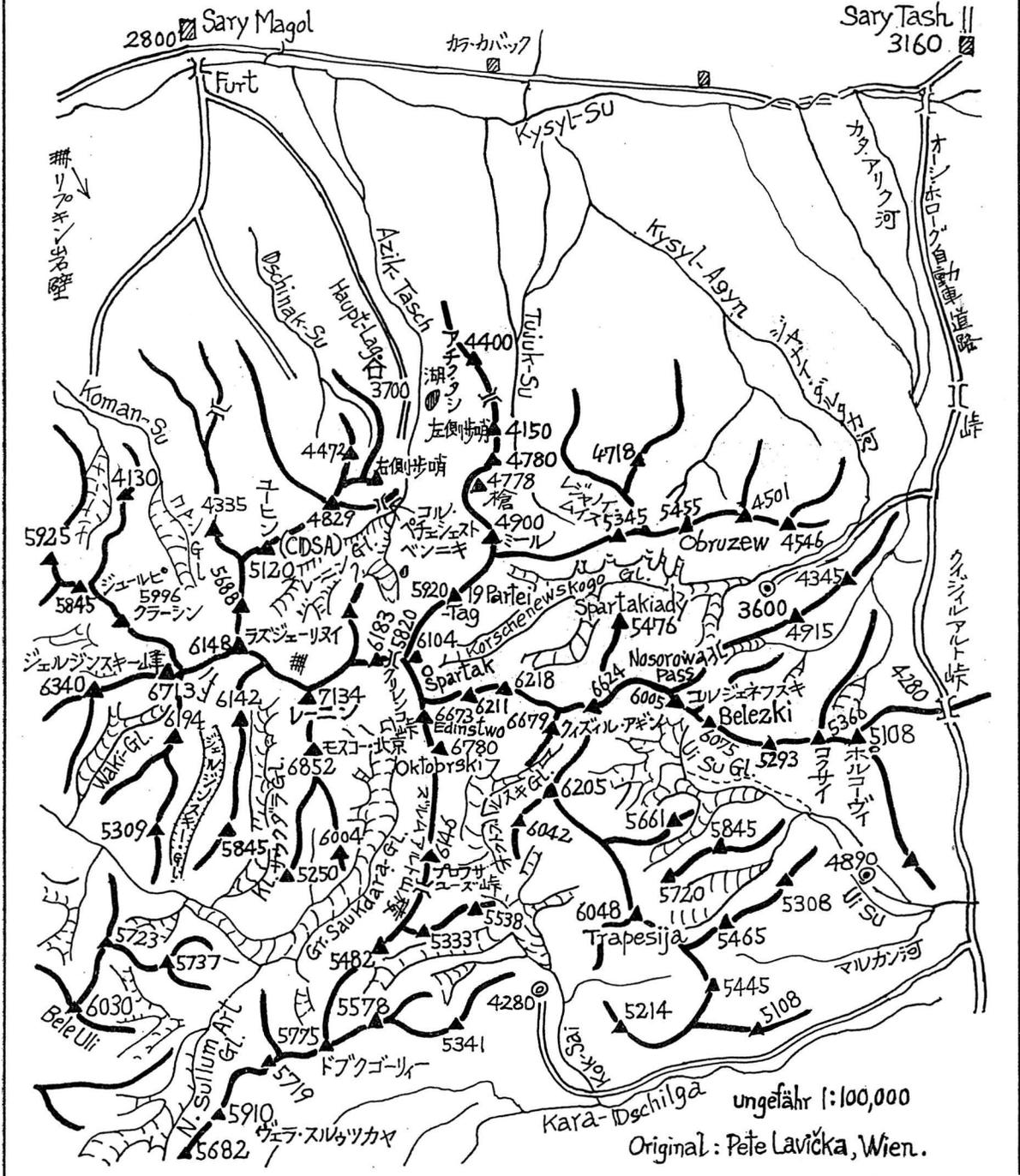
この地図には縮尺約一〇万とあるが「山」の紙面の都合でホンの少しそれより小さくなっている。しかし参考にする程度だったら大した支障はあるまい。

田村君と言えば、先日「山」にクック登山を書いた協坂教授(57歳)が、モスコの学術会議に出席するというので田村君のことを紹介しておいた。ホテルで会って懇談したという葉書が協坂教授から届いた。

日本山岳会の会員が方々に散らばっているという事は便利であるし、心強くなる。私も一度は田村君のいるうちにそこを訪ねてみたい。

(吉沢一郎)

× × × × × × × ×



一九七一年のヒマラヤ

A・プレ・モンスーン

三、マナスル西壁

高橋 照

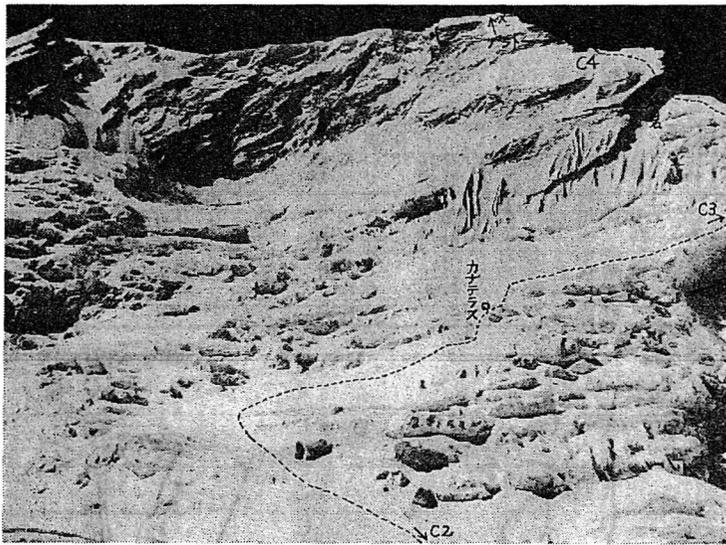
マナスル(八二五六m)は一九五六年、日本山岳会の登山隊(横有恒隊長)によって、その東面から数次に亘る攻撃の後初登頂がなされた、日本人による最初の八〇〇〇m峰である。そしてその日本隊によってヒマルチュリ、ロヒ、パウダ等々と登頂され、所謂

「マナスル三山」の初登頂時代にピリオドがうたれた。

しかし、このマナスルの西側は、かつて、はじめてこの山を望見したティルマンや、日本山岳会のマナスル偵察隊によって、つばさなしでは、全々登攀不可能だと判断されていた。

このたび私達は、このマナスルの西面にルートを求め、日本山岳会によって初登頂された東面へ縦走し、東面のノーマル・ルートを降ろうと計画をたてたのである。

この西側正確に言うると西北壁は約四〇〇〇mの高度差があり、平均角度45度の氷と岩の大削壁でルートの発見は勿論、キャンプの位置すら定かではなかった。



C2 (ABC) より見上げた Manaslu 西北壁の全貌

其処で、一九七〇年の秋、二名の偵察隊員を送り、ベイスキャンプ

ブ迄のコースの発見、それよりアドバンス、ベイス・キャンプ迄のルートファインディング、及び現在大変情勢不安定な状態だと思われる、東側のサマの部落の情報収集など、六〇日間に亘り本格的な偵察を試みた。



C3 崖岩間の西壁を荷上げる。左の岩壁は一気にドモン・ゴアラまで垂直に落ちていく。

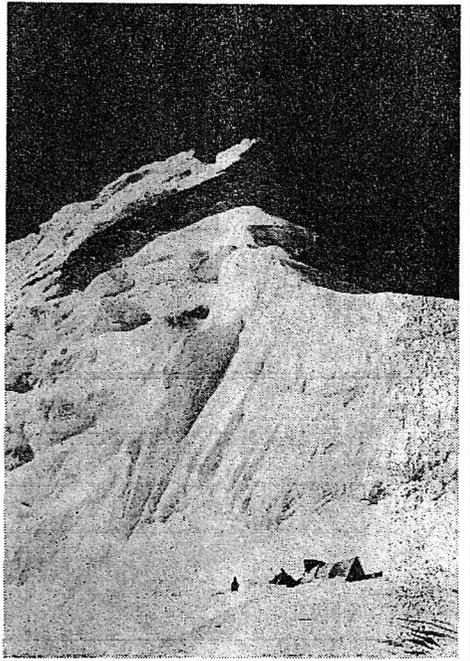
私達のチームは、東京都山岳連盟に属する七つの山岳会より参加した全員で一一名のチームである。費用は隊員各自で持ち寄り、一人当り一五〇〇ドル

でチームをまかなう予定で準備にはいっていたが、偵察隊員が帰国し、その報告によって、相当数の物量が必要なのが判り、一人当り二五〇〇ドル宛出し合せてプロジェクトを結成した。私達チームがネパールにて消費した外貨は、全体で恰度一〇〇〇〇ドルであった。

隊の装備は、今迄各自が夫々使っていた古いものをその仮転用し、登攀用具のみ新調した。固定網は一三〇〇〇m、スノーバーは二〇〇本、その他ワイヤー梯子やデュラルミン梯子などを新に調製したが、結果としては、固定網三〇〇m二巻が残っただけでスノーバーは完全に不足であった。また、アイスハーケン、ほとんどスクリーナーハーケンのみしか使用にたえず、岩用ハーケン一枚岩が多かったせいか、その八〇%がエックスパンション・ボルトの連打であった。

キャラバンは、予定より一五日遅れて3月5日ボカラを三〇〇人のポーターと12屯の荷物で出発した。というのは、印度の陸送が一ヶ月をついやすことになってしまったからである。印度政府は印度・ネパールに国境通過の通商協定をこの年の一月一日付で一方的に破棄し現在失効中である。また二月一七日付で印度大蔵省は、ネパール向貨物のトラック輸送を全面的に禁止してしまつたからでもあった。

したがって、BCよりの登山活動日数を八〇日と予定していたが、大幅に日数を短縮せねば、モンスーンがやってくるので、各キャンプ間の距離を出来るかぎり延し、可能なかぎり前進キャンプをへらしたので、大体各キャンプ間の高差は一〇〇〇mということになってしまった。結果的には、計画では最初キャンプを八つから七つ出す予定のものを実際には五つでおさえたので、モンスーン来襲直前に登頂出来た



C3 (六五〇〇m)と傘岩(七一〇〇m)

ことは、ラッキードと言えよう。
キャラバンはB C迄一日間を要し、ピムタンにあと一日という地点でドゥド・コーラに合流しているドレーン・コーラを遡り、森林限界点にB Cを設ける(二五〇〇m)。最初はこの上部二時間のところにある小さなボカリのある台地(二八〇〇m)をB C予定地としていたが、雪が深いのでポーターを上げることが出来ず、止むなく針葉樹の密生したモレーン上にB Cを作った訳である。おかげで、クレバス用の橋材や、薪が豊富に採れたので、非常に便利であった。

C1は、高度差約八〇〇mのアイス・フォールを登り切った無数のクレバスだらけの四五〇〇mの台地上に作られた。B C建設後、一週間たった三月二一日のことである。
最初、A B C建設地は西稜の末端の台地を予定していたので、ルート工作隊を三組出して偵察したが、どれもセラック帯やアイス・フォール帯を進んだため、仲々良い輸送ルートは見つからなかった。三日目の二月二十四日、エペレストの国際隊、マカールのフラン

C3 (六五〇〇m)と傘岩(七一〇〇m)ス隊がそれぞれB Cを作ったというラジオニュースのあった日、工作隊は、マナスルの北峰の直下をトラバースする、距離は長いが楽な輸送ルートを発見した。ところが、ルートの途中から見上げた、予定コースの西稜は、下半部が全々手のつけれない垂直の水壁で、シェルバに荷上げさせるには全然不向きであることがわかり、雪崩の危険率はきわめて高いが、西稜の中段にあって、西北壁の中段を右斜めに、大トラバースするルートを協議の結果決定した。

C1建設より一週間後に、マナスル西側の内院とも言える、盆地状の広い雪原にC2 (A B C、五五〇〇m)を作る事が出来た。ここは、マナスル直下の雪原で、上部に何段にもなった大きなクレバスがあるため、壁より落下する雪崩は完全に防禦できる安全な地帯であった。その上、西の方面は雪原上に、左よりアンナプルナ連山ドワラギリ、カンダグル、ヒムルル・ヒマール、チエオ・ヒマール等の大観をほしほしに満喫できる素晴らしい

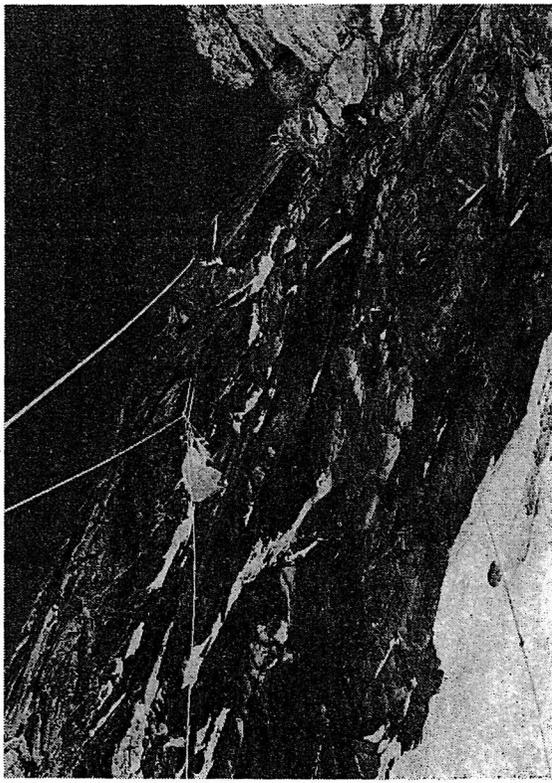
露营地でもあった。
いよいよ、ここを本拠として登攀が始まるのである。

西北壁のトラバース・ルートは平均角度45度の水壁で、上部より絶えずプロックの崩れかきによる雪崩があり、新雪時にはひっきりなしに表層雪崩におびやかされ、ラッセルも時によっては腰から胸までもあって、荷上げは遅々としてはこばなかった。それほど、今年は全体的に悪天候続きで、降雪時には一日一mも積った。

私達およびシェルバ達は、この大斜面に張られた、長さにして二五〇〇m以上の固定網にユマールをセットして登降したため、時々おそわれる雪崩に飛ばされても、滑落から絶えず守られてきた。しかしプロック雪崩には、数回にわたり固定網が一度に二―三〇〇mもスタスタに切断され、スノーパイはアメの様に曲って飛ばされ、その修理作業には手ごつたものである。

A B C (C2) 設営後より一日掛って四月八日、私達は西稜の中段の水稜上の台地にC3を作ることに成功した。高度にしておよそ、六五〇〇mの地点である。

今回の登攀で最も困難と思われた西稜の七〇〇〇m付近に立ちはだかっている傘岩(アンブレラ・ロック)またはトライアンギュラーロック)突破のためには、この水稜上のC3を強化して、必要量の物資をここに集積しなければならぬので、このトラバース・ルートの荷上げには全員これに当たったが、雪崩の頻発する時は、晴天でも行動不能に陥り、また深雪の時には、



C2、C3 両方より行動を起しても連絡のつかぬことがしばしばあった。このルートは、全々ラッセルのない良好なコンディションの時でも、登り七―八時間、下り三時間を要した。したがって、新雪時には一二時間以上掛ったこともしばしばであった。

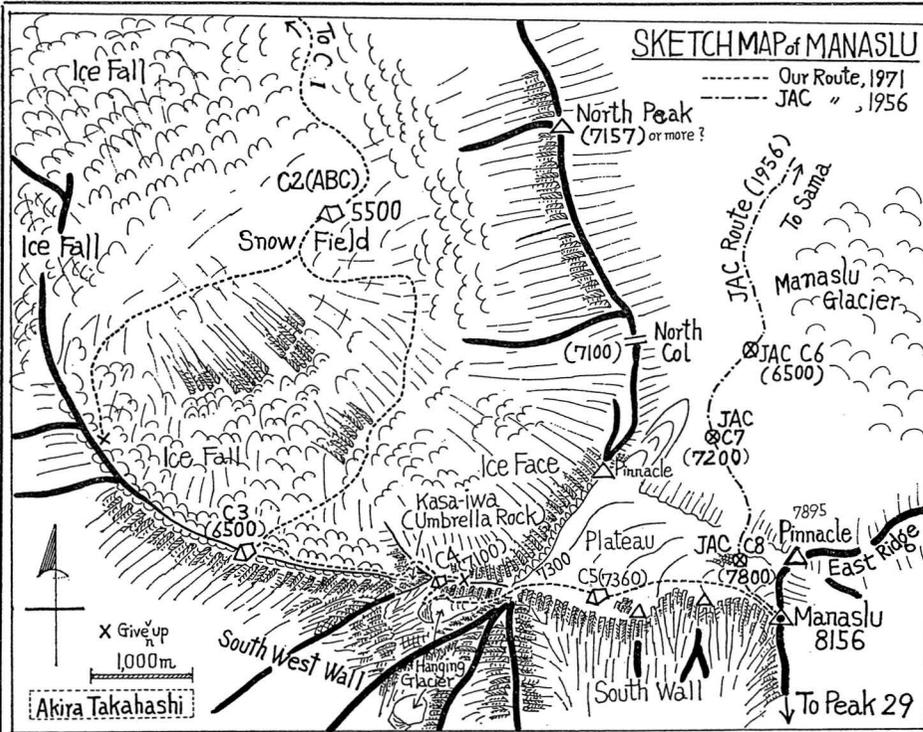
一方、C3にいる工作隊は、キャンブ設置の翌日より、傘岩の下辺の水稜ルートに波状的にルート工作に当り、三日間で傘岩の基部に到達し、全ルートに固定網を固定する。

四月一日よりは、日本の唐傘を半分ひろげたような、三角形の高さ二五〇〇mのオーババーハングした傘岩突破に隊員二人一組の工作隊の波状攻撃をかけたが、C3より傘岩基部まで、固定網が張られルートが完成しているにも拘らず、三時間乃至四時間を消費したため、傘岩の岩場のルート工作は、一日四―五時間に限定されてしまい、結局この岩場だけを突破するのに二〇

日間を要してしまった。

傘岩の登はんルートは、傘岩頂点を直接登らず、左斜めにオーババーハングした凹角の岩場にルートを求めた。最初の壁は二〇mほどの垂直のブルーアイスの水壁で岩場に到達する。そこでアイゼンとオーババーシューズを脱いでピプラム底だけになり、ツルツルの逆層のオーババーハングの一枚岩に、エックスパンション・ボルトを、あぶみにぶら下りながら連打してルートを作り傘岩の肩に二〇日ぶりで到達したのであった。その後この壁には、ワイヤー梯子が空中にセットされ、選ばれた四人のシェルバを上部に上げることに成功したのであった。一〇〇本以上用意したエックスパンション・ボルトも、過半数はここで消耗された。傘岩の岩壁は部分的にはグレード六級と思われる処もあったが、総括的にみて五級のAのIIであった。

(傘岩の荷上げ)



しかし、この傘岩の出口の上部は逆層の一枚岩に薄く、ヘルグラが張りつき、その上に新雪が薄く付着してきているだけなので、極めて安全度が悪い。比較的雪の厚い二〇〇m上部の斜面に荷物の集積点をスノーバーを打ちこんで作る。これで傘岩基部のベルグシュメントに作った集積所と二ヶ所のデポ地点が出来たわけだ。

傘岩突破後、八日後の五月六日夜八時頃、C3建設後二日ぶりで、西稜傘岩上の雪庇の上にC4を建設することに成功した。これは巨大な雪庇が出る位、風の吹き抜ける窓になっており、他のキャンが無風状態の時でもたえず強風にさらされていた。この場所の高度はマナスルと北峰の間にあるいわゆるノース・コル(七一〇〇m)

と同じ高さか、もう少し高い位置であったので一応七一〇〇mとして置く。傘岩の荷上げは、C3とC4の共同作業で行なわれた。C3よりの荷上隊は傘岩基部のデポ地点まで荷上げを行い、その間に時間を合わせてC4より四人のシェルパが傘岩上部まで懸垂かんで下降し、空中に張られたケーブルで荷物を吊り上げ、上部のC4のシェルパは上部デポ地点まで荷物を引上げた。晴天の日は数時間の吊上げ作業が行なわれたが、風の強い日には、作業は全く出来なかった。それでも、約一〇〇kg近い物は、こうして空中を運ばれたのであった。

一方、この荷上げ作業と並行して、C4入りをしている二人の作業隊員は、西稜上にある二人のルート作りを休みなく繰り返したが、C4より頂上プラトリーに連なる岩稜は、逆層の小オーバーハングが無数に連続的に続き、全然お手上げの状態に陥ってしまった。

もし、この岩稜ルートを採用したならば、傘岩に要した日数以上を要することは明白であり、シェルパを登らせることは不可能である。最初、ことによったら、このルートを登ることになるのではないかと考えた、西南壁上部に引掛つて懸垂水河に、最終的にルート作業を試みる。C4より60度の堅い氷壁を懸垂で南側に二〇〇mほど下降し、懸垂水河の末端に立つ。そこより下は、三五〇〇mドレーン・コリアのモレーンまで一気に空中をなぎ落ちていた。足下より吹き上げて来る強風のため、氷は極度に堅く、三〇回以上ピッケルをふるわないと足場が切れなかった。そこより、西稜と懸垂水河の間のベルグシュメントの底を、ある時は西稜側の壁やリブ(側稜)をまたある時は懸垂水河側壁の水の壁をハーケンとあぶみを使って突破し、五月二日、六日ぶりに懸垂水河の上に出て、スクリーナーハーケン二本に固定綱を張って荷上げのためのケーブルを建設した。

この地点までの岩場のグレードは、大体四級と思われるが、高度が高いので極めて困難な登攀であった。しかし、傾斜の強い懸垂水河は、雪崩の危険が極めて高いので、左側の西稜ぞいに、固定綱を張り、頂の上プラトリーに突き上げる水のルンゼを上り、五月一日、C4建設後、一〇日目に七三六〇mのプラトリー上に午後四時最終キャンプC5が出来たのであった。この日は、作業隊員三名、登頂隊員二名、シェルパ四名、計九名に依って二日掛りで荷上げされたが、C5に荷上げされた物量は、酸素ボンベ六本、食料二人で四日分しかあげられなかった。登頂要員二名だけをC5に残し、あとの七名全員C4に引上げた。全印度放送の天気予報は七五〇〇mではNWの風、風速六〇km、温度はマイナス二度、九〇〇〇mではWSWの風、九〇km、マイナス四〇C、天候はサンダー・シャワーと報じていた。C5の位置より頂上までは、距離にして二・五km、高度差八〇〇mあった。もう一つ、キャンプを前進させたかったが、現在の余力は全くない。一気に頂上往復をすべく、出発を朝三時としたが、この高度でサポートなしでは不可能に近い。それでも、午前五時には、二人はC5を出発し、水とシネカブラ、そして時々膝迄もぐるプラトリーの大斜面を休まず前進し、二本目の酸素が残り少なくなった午後〇時一五分宿望のマナスル頂上立ったのであった。

この地点までの岩場のグレードは、大体四級と思われるが、高度が高いので極めて困難な登攀であった。しかし、傾斜の強い懸垂水河は、雪崩の危険が極めて高いので、左側の西稜ぞいに、固定綱を張り、頂の上プラトリーに突き上げる水のルンゼを上り、五月一日、C4建設後、一〇日目に七三六〇mのプラトリー上に午後四時最終キャンプC5が出来たのであった。この日は、作業隊員三名、登頂隊員二名、シェルパ四名、計九名に依って二日掛りで荷上げされたが、C5に荷上げされた物量は、酸素ボンベ六本、食料二人で四日分しかあげられなかった。登頂要員二名だけをC5に残し、あとの七名全員C4に引上げた。全印度放送の天気予報は七五〇〇mではNWの風、風速六〇km、温度はマイナス二度、九〇〇〇mではWSWの風、九〇km、マイナス四〇C、天候はサンダー・シャワーと報じていた。C5の位置より頂上までは、距離にして二・五km、高度差八〇〇mあった。もう一つ、キャンプを前進させたかったが、現在の余力は全くない。一気に頂上往復をすべく、出発を朝三時としたが、この高度でサポートなしでは不可能に近い。それでも、午前五時には、二人はC5を出発し、水とシネカブラ、そして時々膝迄もぐるプラトリーの大斜面を休まず前進し、二本目の酸素が残り少なくなった午後〇時一五分宿望のマナスル頂上立ったのであった。

頂上直下では、一五年前、日本山岳会隊の初登頂者、今西隊員とギヤルツェン・ソルプの二人が岩場に打ち込んだアイスハーケンを抜いて持帰ってきた。恰度、マカル西稜よりの登頂に成功したフランクス・ナッシュナル・チムが、昨年JAC東海支部が頂上にたてた日章旗を持ち帰った様に――。

◆ユーゴも活発◆
ユーゴのヴァアク博士から突然手紙が来た。オーストリアのアドルフ老の紹介だった。月日は不明だが、イストル・オ・ナル(七四〇三m)に南面から直登したという。矢張り登れるんだなあと思った。
ポーランドがキンヤンキン(七八五二m)へ行っただことはイエルジーワラからの手紙で知っていたが、登頂したというニュースには驚いた。隊長はアントセイ・ザワダである。これについてはワラからいずれ何と言ってくると思う。

チェコのイワン・ガルフィ隊もナン・バルベットに成功したらしい。古典ルートだとは思うが立派なものである。
それにオーストリアのフランツ・パーバ隊がダウラギリ(七五五二m)に北面から初登した。これも素晴らしい登攀である。

オーストリアと言えばサブアルプのクルスト・ディームベルガーがいよいよ本を書いた。ドイツ語のはずかし前に出ていたが、私には英訳のをあげるとアドルフから言ってきたので待っていたら、ロンドンの方から先にその広告が届いてしまった。題は「頂上と秘密」という妙な題だった。要するに自伝である。早く読みたいものである。(吉沢一郎)

弥彦山松明登山祭

〇〇〇〇 〇〇〇〇

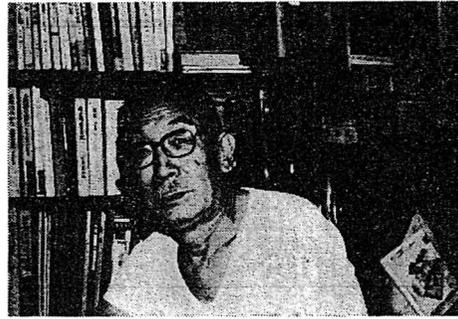


(高頭さんのレリーフの前)

今年機会を得て首記の行事に参加することが出来た。七月二十四日の上野発夜行で新潟へ向った。朝の五時二十分に着いてしまったので出迎えて下さった会員の齋藤平七さんと奥さんにはえらい、ご迷惑をかけてしまったことになる。

新潟の街を見たのは生れてはじめてなので何が珍らしい筈なんだが、表面的には東京と変わらないのでこれといって目を惹くものもなかった。平さんの家で朝食を頂いてそれが終わった頃、里に遊びに来ていた八王子の登喜和の林さんが可愛い娘さん連れて訪ねて来てくれた。直ぐ近所に住んでいたのも、平さんの奥さんとはよく話しはずんでいたようだ。面白いものである。

学生書房の井口さんらが車で迎えに来て下さったのでまず越後支部長の藤島玄さんを見舞いに行く。御二階の書斎兼応接間に通される。御



丁寧にも二度目の交通事故で骨を折った、まだ左足にはギプスをはめられていた。口には石膏がつけてないのでその方は達者だ。日本語の山の新旧本が窓の方を除いた三面にぎっしりと並べられていた。それにしても脚以外はいつもと変りなかったので安心する。先があるので再会を約して辞し、海岸の砂丘の上から市街と海を眺める。雲が低かったので佐渡は見えなかった。それからいよいよ弥彦へ向う。一度寺泊の方へ出て良寛記念館を見学したり、佐渡のないうら淋しい日本海の岸辺を走ってもらって弥彦村の郵便局長をしている花井さんの宅へあがり込む。花井さんはJACの会員で、ヨーロッパの山へも行ったことがあり、弥彦神社の神官をしていた名門である。何かと世話を下さった。

弥彦神社は、越後の一宮。参詣人は常に絶えないが、今日は特に年に一度の灯笼神事があり、それにまた今日はNHK TVの「ふる里の歌祭り」に関連した録画があるとかで、何となくあ

たりが浮立って人の動きも目に立つ。弥彦山松明登山祭は主催が弥彦大祭協賛会と弥彦山岳会、県山協、JAC越後支部、その他八団体が後援という形で毎年行なわれている。今年で十八回目になるという。われわれは少し早目に立派な観光道路を車で頂上の近ままで登ってしまっただけ。何よりもまず高頭さんに敬意を表すため皆で歩いて南側の峰に登る。レリーフは冒頭の写真のような具合にはめられていた。一方では越後平野が一望のうちに納められ、他方は日本海の磯波が果しなく眼下にひろがっている。日本の山岳界の先覚者にはうう訳である。この連山は地塁山脈で東西が断層で中央が隆起したものであるから、両側とも傾斜が強い。従ってここにある小さな沢には滝や急な岩場が適当にあつて若い登山家のいい練習場が沢山あるらしい。時間が来たので奥社のある峰の方へ移る。三々五々老若の登山家が集まつて来た。私は初めてなので何がどうなるのかわからぬままにウロロとしていたが、一応の人がそろって社前ではらいと拝礼を行ない、それから裏側に全員が移動した。ここで新潟大の植物の先生が弥彦山の植物相について興味もあり実もある話をして下さった。私も何かとりよめのないことを少し話して責を果しておいた。

中の急な下りは楽ではないらしい。一時間ばかり下で待っている松明が樹林の中を一列になっておりてくるのが見えた。楽隊を先頭に隊列を作り神社の本殿前に整列、神官長の挨拶をうけてから礼拝のあとまた楽隊を先頭に行進、弥彦駅まで行って解散。近くの広い会館でビール、パーティを開き賑やかに歓談した。灯笼神事の方はおみこしを若衆が担いで街をねり歩き神社まで行くという行事で、東京の町でやっているお祭りと余り変りはないように思えた。二十六日は花井さんらが宿まで来られ、ご自慢の公園を案内して下さいました。ここには公舎なんてありませんね、と言ったらどういたしましてあの通り、指さしたところを見たら、街道に沿った松の木が五、六本枯れて立っているの気がついた。弥彦駅から東三条駅へ行く時は吉田町で乗換えることがあるということを忘れてはならない。私は落ちていて危うく新潟まで持っていけるところであった。最後に花井さんの作った弥彦合唱歌をご紹介します。彌彦山松明登山祭讃歌

彌彦山松明 越路の象徴 二百万人 仰ぎて崇し 神意を慰めむ 岳人集りて 太古の ままの 心を捧ぐ 満山火を高く 輝して進む 岳人三百 意気ぞ高し

尚、宝物館の館主の案内によって見た宝物の中で、有難味のわからない私にも印象の深かったのは、一間ぐらゐもある刀の三、四振り、土地柄でもある上杉謙信の長い手紙であった。神社は一度大火事があったとかである。(吉沢一郎)

◆ネパール・ヒマラヤ全域を上空から観察し楽しむ仲間を募っています 十一月実施予定が休み期間でなかったため人数が集まらず、やむなく延期となりました。HS-174八機(四人乗り)をチャーターして、カンチエングからアビまで、N・H全域を空から観察しようという計画です。ヒマラヤを存分に眺めたい人、偵察をしたい人、すべて大歓迎です。この飛行で撮影する膨大な写真は、IH D(国際水文学十年計画)の資料になり、今後のN・H研究にも役立っています。HS機チャーター費を分担して安くあげたいので、より多くの仲間に参加を呼びかけている次第です。また団体扱いとしてカトマンズ往復の運賃が半額にできますので、「飛行」をしない人も参加が可能です。

計画概要
とき(十二月二十八日から三十一日間、又は二日間) おかね(二九万八〇〇〇円。飛行) しない人は、一八万三〇〇〇円。二日間滞在の人は一五万円を自己負担) 連絡先(東京都千代田区神田松永町一九一近鉄ビル、日本観光文化研究所内八宮本千晴、向後元彦V電話〇三・二五五・七一一(四二七四) (以上広告)

第3回日本ヒンズー・クシユ会議開催
昭和46年11月14日15時10時AM
場所 福井県芦原町 公立学校共済組合芦原保養所「若来荘」
会費 四五〇〇円
申込先 〒910 福井市花堂町 脇之谷12 増永勉男

海外通信

◇◇◇ ガンガブルナ ◇◇◇

お手紙をラグリガラスに頂き有難うございました。総ての準備もすみ二十三日と二十四日に別れてボカラに行き、二十五日キャラバン開始です。
 シェルバ六人、ローカル三人、その他で合計十三人備いました。リエゾンは二十二日に決ります。今年の日本隊では一番早いペースで外務省が追われています。

アルゼンチンのエベレストは八月十五日にラムサングを出ました。他にイランのアンナ四、千葉大のマルクーニ、志岳会のカグマラ、山旅クラブのカンジロバ等がポストにパーミッションを得ています。



また、ティリツオ、ランタンは七年二年前から開禁するとシヤール氏(登山局)は言っていました。HSも資金改訂を明年から使わして頂く一連の状況は、カトマンズ、山崎山、寿雄氏作、厚く御好意を謝す(吉沢宛)

からするようです。パラジュリ、ラマ両氏に官敷伝えました。
 モンズーのカトマンズにて
 (吉沢宛) 八月二〇日 清水

◇◇◇ コラホイ ◇◇◇

スリナガールまでお手紙頂き恐縮しております。

さてコラホイ(五五〇〇m)はかなり難く、上下二段の水瀑をもったコラホイ氷河を抜け、四八〇〇m地点にHCを出し、そこからアタックしました。HCから上は鋭岳チンネ左稜線の岩場とよく似たところで、四十六ピッチで頂上直下の岩場に達し、約五十mの雪のルートになりました。

東稜ルートになります。
 登頂者は菅永進、木津正俊で八月三日十二時四十五分でした。沖と高浜は約五〇〇〇の無名峰に登頂(八月四日)しました。

いい山が多くて楽しんでおります。沖、高浜でスワートへまわり、九月中旬頃に帰国します。登山隊員は蝶を沢山とっています。

本隊は八月十九日に日本に帰着します。ヒマラヤ協会の人も二つほど無名峰に登りましたが、コラホイは登れませんでした。あと十日ほどカシミールの山を歩きます。

スリナガールにて
 (吉沢宛) 八月九日 沖 允人

◇◇◇ イスラマバード ◇◇◇

無事八ヶ月ぶりにラワルピンディに入り、今、リエゾンのつけられるのを市内のホテルで待っています。他の日本隊にはまだ会っていませんので、山の状況を伝えることが出来ません。

また、対インド関係にしてもダッカでは緊迫した場面を度々見ましたが、西のバキスタンへ入ってからはそれも余りなく、表面では昨年と同じです。

尚、われわれの隊の動きに関しては大学の方から通信が行くことと思います。今日はこれで失礼しますがまた手紙を書きます。
 大使館気付 日付無 中村 博之
 (吉沢宛) ブニ・ソム隊である。

◇◇◇ ロンドンから ◇◇◇

暑い東京を脱出してヨーロッパの旅を続けています。北極の上を飛んだ時水原がよく見え愉しい空の旅でした。ロンドンの滞在短かく山岳会を訪れる機を失してしまいました。これからパリに向います。なお、あちらこちらする積りです。赤毛布の旅で恥のかきどおしです。

(吉沢宛) 八月五日 古沢 肇

◇◇◇ ジュネーブから ◇◇◇

ライン河を廻り、フランクフルトでゲーテの家を見、ハイデルベルク、ルツェルン(その前にバイゼン)がありまわがよくなりました。ベルン(静かな美しい町でした)を経てジュネーブにきました。ここは賑やか過ぎます。モンブラン観光に参りましたが、快晴で素晴らしい眺めに満喫しました。どこでも日本人の多いにおどろいています。これからローマに向います。

(吉沢宛) 八月十四日 古沢 肇

◇◇◇ コロンビア氷原 ◇◇◇

六月十六日に発つてまたロッキーマウンテンにやってきました。パンクパーバーはミスさんの家に招かれて、マンデー夫人やニール・カーター博士などに会いました。オハラ湖、バンフ、モレイン湖、ルイズ湖を経て今ここにきています。

今年は大候異変で降雪が続き、仲々山へ登るチャンスが掴めません。これからジャスパーへ行き、トンキン溪谷へ入る予定です。

(吉沢宛) 七月十日 今井 雄二

◇◇◇ カトマンズ ◇◇◇

三年振りのカトマンズでのんびり過ごしています。これからカール、ダーズリン、カリンボンをまわります。尚、私は一九六八年の三月にカンジロバのフォクストンド湖へ行きました。

(吉沢宛) 八月三日 花崎 洋

五〇〇〇m級とは言え、ものすごく悪い氷河と水瀑です。コラホイはBCより第三キャンプまで出す必要がある様です。名城隊はコラホイ攻撃中。われわれもあとを追っています。昨日無名峰の二つに登頂いたしました。仲々面白い山が沢山あります。頑張っています。報告まで。

(吉沢宛) 八月三日 ベースにて、空

◇◇◇ パンクパーバー ◇◇◇

ロッキーマウンテンを右に機はパンクパーバーにきました。未来の国カナダ、その発展振りは大変なものがあります。脚でよく見たいと思います。元気で旅を続けております。調査事項も多いたがそこそこにするつもりです。

視野を広げたいと思っております。
 (吉沢宛) 七月二五日 石坂久忠

◇◇◇ 第12回登山技術講習会 ◇◇◇

例年の通り、初級、中級の方を対象にした冬山登山技術の講習会を左記要領で開催します。

歩行、滑落停止、確保など基礎的な技術を主にしておりますが、頂上にも登る予定であり、期間を通じて、講師や他の参加者との交流は意義あるもの

と思います。参加は、性別、会員、非会員の別を問いませんので、御希望の方は至急本会事務局まで葉書で御連絡下さい。申し込み用紙をお送りします。

記
 十一月二十日(二十三日)
 場所 富士山五合目お庭小屋付近
 費用 会員六千円
 非会員六千五百円
 人員 三十名
 講師 指導委員会委員

◇◇◇ 第14回もみじ会お知らせ ◇◇◇

静岡支部
 十一月十三日(十四日)
 場所 南ア大井川権島、貸切バス
 会費 三千元(静岡より静岡)
 集合 十三日午前十時半
 人員 四十名
 申込先 本会事務局または静岡支部、申し込みと同時に会費をそえること
 持参品 中食二回分、雨具、ライントなど

学生部報告(全学岳連)
 7月2日 例会
 大学山岳部の岩登りについて(新人指導・救助訓練・人工登攀など)
 参加校 中大・高千穂商大・電機大・明学大・明葉大・東洋大・慶大・芝工大
 7月19日 関東ブロック委員会
 日山協加盟問題について(申請書の内容等) 参加者 山崎・宮下・長谷川・村井・熊谷・今村・帰山・平野・高野・竹沢
 9月7日 関東ブロック委員会
 日山協加盟について(申請書提出など) 研修所参加報告(荒井)
 参加者 宮下・村井・熊谷・帰山・平野・高野・荒井・後藤・石塚・竹沢・小松山

会務報告

九月理事評議員会

(二日午後六時半本会ルーム)

▽出席者 三田会長、成瀬、吉沢副会長、藤井、坂下、山崎、野上、渡部、松永、村井、丹部、大森、宮下各理事、牧野内委員、折井、佐藤評議員、今井監事

▽議事

・上高地山荘の件 (山崎)

自転車振興会および環境庁への手続きの書類を製作中で、設計図および見積書を付し、至急提出する準備を進めている。自転車振興会の交付金申請については文部省スポーツ課にも了承を求め、バックアップを依頼し、九月中旬までには手続をすませたい。なお安彦氏を山荘委員にお願いする。

・自然保護の件 (山崎)

今回結成された全国自然保護連合に山岳会として加盟する方向で、具体的な問題は自然保護委員会に一任する。この件了承。

・アマチュア規定問題の件 (丹部、山崎)

本会々員で日本アルパイン・ガイド協会に加盟し、プロとして行動しているものがおり、日山協のアマチュア規定に抵触する疑いが生じている。この件については日本山岳会として態度の決定を日山協から要望されている。JACとしては、次回常務理事会でこの件についてさらに検討することにした。この件了承。

・会員名簿の件 (坂下)

九月中旬までに印刷所へまわすよう作業を進めているが、人手不足のため専属のアルバイト一名を雇いたい。この件了承。

の件了承。

・山日記の件 (牧野内)

十二月初旬発行を目標にしている。今年度は、会員全員に無料配布は発送の点で難があるので見送り、十二月の年次晩餐会の出席者にだけ配布するようにした。この件了承。

・推薦状の件 (山崎)

明大山岳部のラカボシ遠征、および無宗楽生会のアンナブルナ遠征に本会の推薦状交付を申請してきたが、明大のラカボシはさきに推薦状を発行したヌプツ遠征と同じメンバーがほぼ同時期に行くことになってしまったため、またアンナブルナ遠征は、無宗楽生会の実体が不明なため、いちおう推薦状発行は見合わせる。この件了承。

・国際山岳連盟の件 (吉沢)

本年度の総会は十月十五日ポロンドのザユバネで開かれるが、本会からの出席は中止。来年はスイスで開かれる。また明年のミュンヘン五輪のとき、ドイツ山岳会で青年の会を開くので日本にも参加を要請してきている。

▽報告

・山岳の件 (山崎)

山岳六十五年はたいへん遅く来たが九月三十日ごろ出来上る。

・婦人懇談会 (渡部)

九月四日、今井嘉道会員のところでヨードル・レコードを聞く会を開く。渡部理事は結婚のため十月北海道に移るが、出来るだけ理事会には出席する。

・医療 (大森)

国立公園協会からの夏山診療所助成金五十万円は四十四年度、四十五年度分をそれぞれ十四校に分配した。なお松方三郎氏は八月十七日ジャンボ大会お別れパーティのさい中東京プリンスホテルで貧血をおこし、慈恵医大に入院、検査の結果十二指腸かいようからの貧血で、現在はすっかり回復し九月中旬には退院する。

・ネパール・インド、トランジット条約の件 (丹部)

一九七一年八月十三日、ネパール、インド間の貿易、輸送条約が調印された。ネパールへの荷物の輸送が便利になった。

図書室便り

(昭46・8)

新刊図書受入報告

筑摩書房寄贈

(1)今西錦司著『自然と山と』 昭46 実業の日本社寄贈

(1)脇田恵暢著『東南アジアの旅ブルーガイド海外版JALシリーズ12』 昭46

(2)渡辺正臣著『伊豆ブルーガイドブックス155』 昭46

日本山岳会編『山岳』総索引 第26年 第1号・第60年 昭46

定期刊行物受入報告

【部報・会報類】

(1)長崎山岳会『あしあと』 (46-8) 51 (46-8)

(2)兵庫山岳連盟『兵庫山岳』 No. 51 (46-8)

(3)国立公園協会『国立公園』 No. 260 (46-8)

(4)京都山岳会『京都山岳』 No. 556 (46-8)

(5)東京野歩路会『山嶺』 No. 496 (46-8)

(6)日本自然保護協会『自然保護』 No. 110 (46-8)

(7)低い山を歩く会『低山』 No. 74 (46-8)

(8)日本山岳協会『登山月報』 No. 29 (46-8)

(9)日本登山協会『山と雪』 No. 160 (46-8)

【雑誌】

(1)『アルプ』 No. 162 (46-8)

(2)『岳人』 No. 281 (46-9)

(3)『山と溪谷』 No. 396 (46-9)

【その他】

(1)『チューレン・ヒマール』 東京大学ネパール・ヒマラヤ遠征隊報告

(2)明治大学体育会山岳部『明治大学ヌプツ登山隊計画書』

(3)文化出版局 季刊『銀花』 71第7号 秋

Journals Arrived in August 1971

1. "Der Regesteiger" 38 Jah. Heft 7, Juli 1971

2. "Panorama of Slovakia" 1971 -2

3. "Rivista mensile" Anno 92. No. 5, Maggio 1971

4. "Switzerland" 1971 No. 1

5. "Verkehrsruch" 43 Ausgabe. Sommer 1971

図書紹介

奥黒部に逝く

三菱商事山岳同好会編

岡部浩子さんが黒部の東沢付近で集中豪雨のため遭難し行方不明になったと伝えられたのは、ほんのきのうのことのように思っていたが、こんどその追悼集「奥黒部に逝く」をかっつての間であつた山口節子さんから贈られ、あれからもう二年以上たったのかと思わずつぶやいた。

岡部さんは、婦人懇談会の優秀なメンバーとして、穂高や、富士で行なつた本会の登山技術講習会にも何度か顔を出し、私などもいろいろお手つだいしてもらったものである。この八月、奥黒部で彼女の三回忌をすませた山口さんは、秋田しおみ、羽賀育子のニュージージョンド登山隊の仲間との連名で

「去年は、遭難直後右岸深いに流れていた東沢が左岸に移っており、二人のためにたてたケルンの台地があたかもなく流されているのに茫然としたのですが、今年の夏は緑がふえて当時の生々しさはいくらかうすれました。それにしても彼女はどこに居るのだろう。教えてくれればいいのに」と腹立たしくなりませう。」と添書してあった。巻頭に載っている彼女の最後となったスナップも思ひ出をあらたにする。(山崎安治) 昭和四十六年八月十一日、三菱商事山岳同好会発行、頒価七百円、一五八ページ。写真多数。希望者は千代田区丸の内二一六―三の同山岳同好会まで、送料九十五円をそえて申し込めばよ。

東京から見える山

横山 厚夫著

山の本といっても、それこそいろいろな種類のものがあるが、本書のような内容のものは単行本としては初めてののであろう。木暮さんの研究が終戦直後朋文堂から出たという話も聞くが、小生はまだ現物を見ておらず、こんど著者によって、木暮さんの研究を土台に、さらに興行きを深め、最近の状況をあわせて一本にまとめられたことはたいへん喜ばしい。

「江戸から見えた山」、「東京から見た山」、「富士山」、「展望台とパノラマ写真」、「丹沢山塊」、「奥多摩の山々」、「奥秩父の東端」、「奥武蔵」、「北にある山」などの十一章にわけて著者は写真と地図とスケッチをそえたんねんに東京から見える山の姿を追い求めたい。

かり形を変えてしまふ山も多く、ずいぶん形が変ることに著者は驚ろいており、一単に山を見て、あれが何という山かを知るだけでなく、その中から自分の好きな山を得ていくことも、山を見る楽しさを増していくことだと著者は結んでいる。それにしても東京から富士山の見える日が一年に二十日程度といういまの東京の空は何とかならないものであるか、この本を読んだ、このことが特に強く感じられた。

(山崎安治)

昭和四十六年六月九日内出版発行、一九六ページ、地図、写真多数、定価七百円。

第二七五回現地小集會

小野 利次

第二七五回現地小集會が八月十四、十五の両日数馬の山崎屋を宿舎として行なわれた。五日市から御一緒に来た神谷氏を始め、先輩の方々とはバスの人となる。走り去る窓外の景色もすっかり変っている。鄙びた杉皮葺の屋根が点綴する昔の俵はもうない。私の三十年前の山行記録の一節にはこんな風にしてのされてある。田部重治先生の「馬の一夜」に憧れた数は、五日市から南秋川の街道を歩いて教馬の山里に着いたのは、夕餉の煙が棚引くころであった。真正面に聳え立つ三頭山も夜のとばりの中にぼかされて、頂上辺りが残照に赤く染っていた。

薄暗いランプの灯がゆらぎ、囲炉裏の樽火に手をかざして食べる山菜は実に美味である。暗い底から湧き上る溪流の音が、ときれとぎれに聞えて来る。東京の桜はすでに散ったというのに数馬の夜寒は板戸の間から遠慮会釈なく忍びよって来た。色褪せた感傷にひたっているとバスはいつの間にか山崎屋の前に止っていた。木の音を吹

き抜けて来る風はさすがに涼しく残暑に喘いでいた私達をほっとさせてくれる。神谷氏の語る人里の怪談は特に興味をそそった。

「もう、五十年も昔のことですが、西川橋のたもとに旅館に泊った時のことです。」

「夜中に僕の部屋の襖がすうっと開いたのでおやと思っただけで起きると、そこには三本足の化物が立っていて、僕の顔を見てニタニタと笑っていたのです。」

「びっくりして布団をかぶったまま一晩中ガタガタ震えていました。」

「翌日、数馬に着いてこのことを話すと。」

「出ましたか。」
「言うのでわけを聞くと、その家は狐師を生業としていたので、鳥の怨霊が祟って、代々片輪者が生れるという。やがて長い夏の日も西に傾くころ、川原で焚火を囲んで懇親会が開かれた。パーベキュー、山菜料理を肴に、罐ビール、お酒、ウイスキーなどで欲談する。」

翌十五日は薄曇りなれども時折り日の射す登山日和である。

七時朝食、一同揃って記念撮影七時四十分、三頭山へ出発、逍遙を楽しむ人達に送られ、手を振りながら、それぞれのペースでゆっくりと行く。街道の両側には、兜屋根、半切妻の古民家が立ち並んでいるのを見ると嬉しくなる。集落を抜けると、山腹を削って観光道路の工事が始っていた。われわれは行き過ぎた観光開発の現場を見て、自然保護より現実的な利用が優先し、はばをきかせていることに憤慨するより、むしろ情けない思いを味わった。十時三十五分、標高一五八二mの三頭山頂に着く。三頭山は名の示す通り、東峰、中央峰、西峰から成り立っていて、頂上付近は樹林に囲まれている。

(第2回ジャルパック特別コース)

(団長：日高信六郎氏)

出発日と帰着日 11月14日(日)~11月27日(土)

ヒマラヤ山岳とインドの旅 14日間 388,000円

スケジュール

- 11月14日 東京発→カルカッタ着(午前)日航機で、インドのカルカッタへ。(夜)到着。着後ホテルへ。
- 11月15日 カルカッタ発→カトマンズ着(午前)空路ネパール首都カトマンズへ。(午後)市内観光。
- 11月16日 カトマンズ発→ポカラ着(午前)空路ヒマラヤの眺望がすばらしいポカラへ。(昼)到着。(午後)自由行動。
- 11月17日 ポカラ滞在(終日)自由行動。ここからはネパール・ヒマラヤのアンナプルナ 8,078m、ダウラギリ 8,167m、マチャプチャリ 6,998m、といった世界の巨峰が仰げ、そのスケールの大きさは、世界の果てを思わせます。
- 11月18日 ポカラ発→カトマンズ着(午前)自由行動。(午後)空路再びカトマンズへ。(夕刻)
- 11月19日 カトマンズ発→ルクラ=ジョサレ着(午前)空路ルクラへ。ルクラは標高 2,700m、もう大ヒマラヤのふところ。ジョサレまで約5時間の道のりを、エベレスト登山者チョタレイ氏(シェルパ)がご案内します。(夕刻)ジョサレ着。大自然の夜をテントで迎えます。
- 11月20日 ジョサレ発→ナムチェバサル着(午前)標高 3,800mのナムチェバサルまで登山ヒマラヤのエキスパート、日高信六郎、チョタレイ両氏といっしょに約6時間、世界の屋根大ヒマラヤの自然をふみしめましょう。(午後)めざすナムチェバサルのエベレスト・ビュー・ホテルに到着。
- 11月21日 ナムチェバサル滞在(終日)自由行動。白い巨峰ヒマラヤの眺望は、いくら眺めても

- あきません。澄んだ空気の中でゆっくりとお過ごください。
- 11月22日 ナムチェバサル滞在(終日)自由行動。ホテルの周囲にはめずらしい高山植物が咲いています。エベレストをバックに記念撮影をどうぞ。価値ある思い出となるでしょう。
- 11月23日 ナムチェバサル発→ルクラ着(午前)標高差 1,000m をいっきに下山。(夕刻)ルクラの民宿に到着。
- 11月24日 ルクラ発→カトマンズ着(午前)空路カトマンズへ。(午後)自由行動。
- 11月25日 カトマンズ発→ニューデリー着(午前)自由行動。(午後)ヒマラヤの国ネパールに別れを告げ、空路インドの主都ニューデリーへ。
- 11月26日 ニューデリー発・アグラ・ニューデリー着(終日)特別専用バスでインド第一の観光都市アグラを観光。
- 11月27日 ニューデリー発→東京着(朝)日航機で空路帰国の途。(夜)到着、着後、空港で解散。

特記事項

●お申込み・お問い合わせ先:

東京都港区新橋 1丁目18番1号

〒105 (飛行館1階)

電話 03(504)0271(大代表)

三井航空サービス株式会社

旅客部 団体課 須山 敬

快晴なればかなり眺望が利くが、生憎と霞のかかったような空模様のため、数馬の集落のみが墨絵のように沈んで見えていた。ここで一時間の休憩と昼食をとり、下山の途に着く。秋川の橋を渡ると山崎屋は近い。かくして二日間にもわたる行事も終了。十五時三十五分のバスで数馬を後にした。

ルーム日誌(46年8月)

- 3日(火) 訪台打合せ
 - 9日(月) 集委会委員会
 - 10日(火) 山荘対策委員会
 - 18日(水) 名簿委員会
 - 20日(金) 常務理事会
- 八月中入室者 二一六名

復活会員(46年8月)
一八〇〇 加藤武三 広島県佐伯郡五日市町楽々園東町
退会(46年8月)
一九八三 仰木政次郎

マナスル隊交歓会 九月六日午後六時半から本会ルームでマナスル隊交歓会が開かれた。この春西壁からマナスル登頂に成功した高橋照隊長をはじめ、西壁隊メンバーと、もとJACマナスル隊の榎、三田、田口、小原、今西寿、加藤、日下田、松田各隊員らが集まり、それぞれ思い出を語りあい楽しいひとときを過ごした。なお高橋隊長より頂上行近で発見したガルツェンの打ち込んだというアイスハーケンが記念に本会に寄贈された。

あながき とにかくいそがしいので本号は大部分吉沢氏におんぶしてしまつた。次号は気合をかけてやるつもりです。
(山崎)

昭和四十六年十月十日発行

東京都千代田区神田錦町
三十三 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治

(293) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

森林・草原・氷河
加藤泰安著
〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話
初見一雄著
〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山
望月達夫著
〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に
大島堅造著
〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山
川崎精雄著
〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと
坂本直行著
〈B5判206頁〉定価2,800円

日高を歩き続け、日高を愛する北大山の会の人々が綴る日高山脈の全て。

日高山脈
北大山の会編
〈菊判362頁〉定価2,200円

山岳
日本山岳会編
〈A5判〉

総索引	1,000円
64年	2,000円
63年	2,200円
62年	2,000円
61年	1,800円
60年	1,500円

国立公園カレンダー
国立公園協会編
〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然
赤星昌編
〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集
戸野昭・朝倉宏編
〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

山に忘れたパイプ
藤島敏男著
〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅
足立源一郎スケッチ帖
〈A変型208頁〉定価3,600円

アンナプルナ日記
京都大学学士山岳会編
〈A12取変型判170頁〉定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン
高橋進編
〈A5判350頁〉定価900円

キンヤンキッシュ1965
東京大学カラコルム遠征隊編
〈B5変型判220頁〉定価3,000円

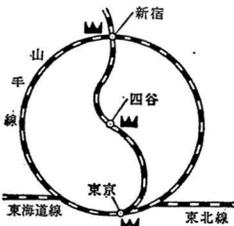
南極新聞1956～7年
南極研究会編
〈B5判横トジ〉定価600円

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

- 買いやすい山の店
- 北へ来たたら山の店
- フレッシュな山の店



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 たかはし

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番

なるべくなんにも
持たない方がいい
けれど、どうも
要るものがある。
なにしらん人間ですか
そして、登山ですか
どしても必要なもの
をこころえまわす
責任は、もっています

かたるびンテイ
てんや 281-8456
中央区八重洲4-01

秀山荘

登山とスキー一具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘



東京店・中央区銀座2-4-5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2-4-4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曾根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1-4 (28) 34440